

私立スプリング予備校 第十二講



今期、当予備校の授業目標は、『カタサ試験機を中心とした日本ばね工業の発達史』でしたが、この項をもって一応けりをつけたいと思います。

○新型機の進出

当研究所がロックウエルとビッカースのカタサ試験機を入手したのは、それぞれ昭和3年と10年になっています。試験機が発明されてから10年目に購入されたこととなりますから、それほど早い入手とはいえません。おそらく日本のばね工業界にも、両試験機はこのころに前後して進出したものと思われます。昭和13年頃からピアノ線の国産化の研究が推進されましたが、ビッカースなどはこの研究には大いに役立ったわけです。現在、国鉄の板ばねは一枚一枚かたさを測定してありますが、このようになったのは昭和27年からで、このためこの年には国鉄の全工場にブリネルカタサ試験機を一斉に取付けました。この年にはいろいろと国鉄のばねの仕様書や修繕作業法が変わったわけですが、このように一枚一枚にかたさ試験をおこなうようになってからばねの事故件数は急激に減少するようになりました。かたさの総まとめとして、ばねには適正かたさが如何に大切か、その具体例を申しあげました。いずれこのことは後日グラフによって詳しく説明したいと思います。

○自動車工業と部品工業

現在のばね工業はなんと申しましても自動車工業と深いつながりがあります。そこでもう一度、この間の家庭の事情を探ってみましょう。…国ノ独立ヲ鞏固^{※1}ニセントセバ、軍艦兵器ノ製造ヲ独立セシメザルベカラザルナリ…これは明治24年、政府が鉄鋼業を官営で独立する方針をきめ、議会に提出した説明書の中の一文であります。今をときめく製鉄業も日本においては、軍事工業の基礎として、国家の間接的保護育成をうけて温存された産業といえるでしょう。日本の自動車工業も、これと似たような条件で誕生したことは前述したとおりです。ここで問題となるのは、そのさい、国鉄の助成目標がカーメーカに集中され、部品工業としてはわずかに車輪製造業がとりあげられたにすぎなかったことです。したがって、スタートラインからカーメーカとの間に大きな格差がついており、その格差はその後ますます拡大して、現在では部品工業の後進性が逆にカーメーカの発展を阻害している原因の一つになっています。この点、アメリカのように国民大衆の購買力を基盤として、自然発生的に成長してきたのとは大部事情が異なるわけです。聞くとところによりますと、アメリカの自動車工業では、大メーカは大部分の部品が自家生産できる状態になっており、それ以下のメーカは部品工業への高い依存度を示し、カーメーカというより自動車組立業に近いものさえあると聞いています。しかしこれらの部品メーカは一流の専門メーカで、カーメーカ各社の部品を共通に受注して大量生産しているので廉価に供給されているとのこと。いかなればカーメーカと部品メーカが対等の地位を占めているとあってよいでしょう。日本の自動車工業に対するばね工業はどうでしょうか？この結論はとても、予備校の先生などでは判断出来ませんので、実際にばね工業界に活躍されておられる皆さんが決めて下さい。

株式会社アキュレイト 渡邊 信一

うえぶさいと www.accurate.jp 電子手紙 customer@accurate.jp

※ 本文は昭和41年から44年頃にかけて、新聞に掲載された記事の抜粋です。アキュレイトでは、掲載に携わった方々を探しています。また、工業規格や技術用語などはオリジナルのまま掲載しております。その為現在の規格と異なる表記がございます事をご了承ください。

※ 本文内容の転記・複写・改編を禁じます

まただれでもお気づきのことと思いますが、つぎのような問題点が両者の間にある事だけを付記しておきましょう。それは、カーメーカが部品業者を系列化し、部品の規格の単純化を計らないため、量産を行うことに支障があることと、一方カーメーカと関係をもたない部品メーカが多く、低賃金を武器として安値競争をするため業界全体の安定がさまたげられることなどです。さて今回は、今期の最終授業なので固苦しいことを申しあげましたが、一応ばね工業界に献身なされている皆さんに、歴史約な推移と現状を説明いたしました。永いこと続きました、この予備校もこれをもって、一応授業を休みます。また近いうちに、開校いたしますが、どうぞこの間に大いに自習勉強されて、わが予備校の精華を業界に反映願えれば幸いです。

では今期は、ここまで。

以上

※ 1 鞏固=強固

**オリジナルをそのまま掲載しておりますが、当時の新聞掲載においてはここで一旦休みとなった様です。本コーナーは今までと変わらないペースで掲載いたします。

株式会社アキュレイト 渡邊 信一

うえぶさいと www.accurate.jp 電子手紙 customer@accurate.jp

※ 本文は昭和41年から44年頃にかけて、新聞に掲載された記事の抜粋です。アキュレイトでは、掲載に携わった方々を探しています。また、工業規格や技術用語などはオリジナルのまま掲載しております。その為現在の規格と異なる表記がございます事をご了承ください。

※ 本文内容の転記・複写・改編を禁じます